



追跡 リクルート疑惑

スクープ取材に燃えた121日

朝日新聞横浜支局

追跡

リクルート疑惑

スクープ取材に燃えた121日

朝日新聞横浜支局

朝日新聞社

追跡 リクルート疑惑

スクープ取材に燃えた121日

1988年10月15日 第1刷

定価 980 円

1988年11月30日 第3刷

著者 朝日新聞横浜支局

発行者 八尋 舜右

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03-545-0131 (代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 (東京) 0-1730

Printed in Japan

© Asahi Shimbun 1988

ISBN4-02 255948-9

目次

プロローグ 5

第一章 つぶれた助役収賄容疑 7

第二章 調査報道で追いつめる 40

第三章 助役解職 94

第四章 疑惑は政界へ広がる 118

第五章 永田町と格闘 164

第六章 “錬金術”の実態浮き彫り 205

エピローグ 244

あとがき 247

裝幀・多田
進

追跡
リクルート疑惑
スクープ取材に燃えた
121日

プロローグ

7月6日 午後一時半、東京・永田町の竹下登事務所。竹下首相の片腕といわれる青木伊平元秘書の部屋。壁は水墨画や掛け軸で埋めつくされ、棚や窓際にも置き物が所狭しと飾られている。秘書事務所というよりは書斎だ。横浜支局の奥田明久と堀江隆両記者のインタビューに対し、青木元秘書はリクルートコスモスの未公開株を得て、登録直後に売却したことを認めた。この日までに、中曽根前首相、安倍幹事長、宮沢蔵相ら政界要人の秘書や家族、それに本人がリクルートコスモス株で大もうけしている事実が、朝日新聞横浜、川崎両支局の取材で、記事になっていた。政界は、リクルートスキャンダルに大揺れに揺れていた。

青木氏は、インタビュ어의最後にため息をもらしてこういった。

「まさか、こんな話になるなんて夢にも思いませんでしたよ、株を買った時にはねえ……」

政界の表も裏も知りつくした青木氏の顔に、内密の株取引が表面化したことへの驚きが、うかがえ

た。

ばれるはずはなかった。未公開株を安い価格で譲り受け、株価のハネ上がった公開直後に売り抜ける。ぬれ手でアワのこのうまい話は、すべてヤミからヤミのはずだった。が、思わぬほころびから、明るみに出たのだった。

すべての始まりは、川崎市助役の疑惑だった。

第一章 つぶれた助役取賄容疑

3月23日 午後十一時。朝日新聞横浜支局の神奈川県警担当キャップの鈴木啓一が夜回りから支局へ戻ってきた。ソファで、ぼんやりとテレビを見ていたサブキャップの長典俊に、

「メシ食いに行こう」

二人は、支局近くにある「千草」に行った。ここは代々、県警担当が利用している飲み屋だ。カウンターだけの、十人も入れない狭い店だが、安くて家庭料理が味わえる。深夜までやっていることもあり、記者にとってはありがたい店だ。二人は、ビールとコロッケを注文した。

「じつはな、二課がまた何か狙ってるらしいんだ。川崎かどこの市の汚職だ。ちょっと探りを入れてみてくれないか」

と鈴木。

取材先のなかでも汚職や知能犯事件を扱う県警捜査二課は、とりわけ口が堅い。さらに、地検とも

なるももっと口が堅く閉ざされる。情報は相手の表情などから読み取っていくしかない。翌日から鈴木と長は、手分けして、捜査員とのにらめっこ、腹の探りあいをする夜回りを進めていった。

4月11日 「啓さん、やっぱり川崎みたいだよ」

支局のソファで寝ていた鈴木は、夜回りから帰ってきた長に揺り起こされた。午前零時半、日付はもう十二日に変わっている。朝刊の最終締め切りまで、あと一時間ほどだ。支局内では、泊まりの記者が警察などに事件や事故の発生をたずねる警戒電話を入れている。

「そうか、川崎か」

鈴木はうなずいた。

横浜支局の県警担当グループは六人。県警担当といっても、神奈川県警だけではなく、横浜地検、横浜地裁、第三管区海上保安本部、横浜税関も持ち場だ。持ち場に関することは、すべて責任範囲。どこで他社に抜かれるか、戦々恐々の毎日だ。

4月12日 午後十時。鈴木は支局から、川崎支局の斎藤義浩に電話をかけた。

「ああ、斎藤ちゃん。横浜の鈴木です。じつはね、県警の二課が川崎をやってるみたいなんだよ」

「エッ、本当？」

斎藤は川崎支局の市役所担当だ。五十八年四月に入社、水戸支局を経て六十年十一月に川崎支局に。

以来、ずっと市役所担当だ。

「うーん、小松助役かなあ」

斎藤は続けた。

「小松秀熙ひでき助役は川崎でも有能で知られている。あだ名は、川崎の人間機関車。この前なんか、ある経済誌が小松助役の特集をやったぐらいだよ。でもね、悪い噂も多くて、先月も、川崎駅前に進出した大手の不動産会社に便宜を図ったんじゃないか、と議会で、野党の自民党から問題にされたんだ」

鈴木は、六十二年五月に横浜支局に赴任した。五十七年に入社後、週刊朝日、朝日ジャーナル、アサヒグラフと、雑誌畑を歩いてきた。新聞記者の基本といわれる警察担当、いわゆるサツ回りの経験はない。六年生、つまり入社六年目になって、初めてのサツ回りだった。

いま、ようやく大事件にぶち当たったらしい。だが、これが、その後、永田町をも揺るがす「超大事件」に発展するとは、この時夢にも思っていなかった。

4月17日 暗いタクシーの車内で、鈴木はじっと捜査関係者の帰宅を待っていた。午後十一時を回っても、まだ、目指す相手は帰ってこない。

鈴木は前日、川崎支局の斎藤から、川崎市政の最近の動向、とくに小松助役に関するレクチャー

(説明)を受けた。

「やっぱり、小松だろうな」

斎藤はいった。

「相手はA不動産の可能性が強い」

そうもいった。

十一時半、目指す相手が千鳥足で帰ってきた。相当、飲んでいるらしい。鈴木は車を降りて駆け寄った。

「××さん、どうも」

「おっ、どうした。何だ。何かあったのか」

「いや、ちょっと、お聞きしたいことがあって」

「何だ」

鈴木はいきなりあててみた。

「次は、小松ですか」

相手の顔色がみるみる変わった。急に真顔になっていく。

「当たり前だ」

鈴木は心の中で快哉を叫んだ。たたみかけるように、

「贈（贈賄側）はA不動産ですね」

相手の顔色が、また変わった。それでも、落ち着きを取り戻すと、今度はニヤニヤ笑いながら、

「そんなこと、いえるか。もう、ほら、帰れ」

(やっぱり小松だ。しかし、A不動産は関係ないようだ。じゃ、贈賄側はどこなんだろう)
頭の中で鈴木は、先ほどのやりとりを頭の中で何度も反芻はんすうしながら、考えていた。

4月18日 「午後二時」という時間は、新聞記者がもつともホッとする時間だ。夕刊の締め切りが終わり、他社のキャップたちは県警クラブのソファに寝そべって雑誌を見たり、昼寝をしたりしている。鈴木は他社に気づかれないようにクラブを脱け出し、約三百メートル離れた支局に向かった。

支局の中央にある六角机には、デスクの山本博が待っていた。山本は六十一年十二月に横浜支局のデスクに赴任したが、それまでの十五年間は社会部員。「談合」キャンペーンや東京医科歯科大教授選出汚職事件報道で、新聞協会賞も受賞している。通称「バクさん」。あるいは「山ちゃん」。よく、若い支局員を叱咤激励し、「おっかないデスク」として名を馳せていた。

鈴木が支局に入ってくると、山本は、

「何だ、いい話か」

と、低い声でいった。

「川崎の助役がらみでサンズイ（汚職）があるようです」

鈴木は、これまでの取材経過を手短に報告した。山本の目がキラリと光った。特ダネになりそうなネタを拾ってきて、いつも最初は、そっけない応対をする山本だが、眼光是厳しい。本当にいいネタの時には、その目はキラリと光る。

「そうか。わかった。面白そうだ。全力をつくしてやれ。奥田と堀江の二人をルーティンから外して、専従させろ」

当時の県警グループは、鈴木の下がサブキャップの長で二年生の堀江隆、六年生の奥田明久、それに四月に国際配信部から転勤してきた三年生の崔麻砂と、同じく四月に新入社員として入社したばかりの五十嵐道子の二人の女性記者。スポーツ担当の二年生山部彰一も時どき手伝う。「この中から、二人も外すと、ルーティンがきつくなるなあ」。鈴木はつぶやいた。

4月19日 昼下がりの神奈川県警記者クラブ。夕刊の締め切りがすぎた午後一時半すぎ、奥田が重いシヨルダーバッグを肩に食い込ませながら姿を現した。四月一日付で、函館から転勤してきたばかりだ。

「奥田、ちょっと、ちょっと」

春の陽気に誘われて昼寝を始めている他社の記者を横目でチラッと見ながら、キャップの鈴木が小声で言った。

奥田に耳打ちした。

「川崎でサンズイがはじけそうだ。収賄は助役。贈賄側がまだわかっていない。捜査の進展が早そうだから、今からすぐ長と川崎に行ってくれ」

「はじける」とは、内偵を終えて捜査に着手することだ。奥田の顔がみるみる間にひきつった。記者

になって六年目。小さな汚職事件は何度か手がけたことがあるが、助役クラスの大物となると、まだ経験はない。

タクシーを呼び、他社の記者連中に不審に思われぬように、そっと記者クラブを脱けた奥田は、県警前で長とおち合い、川崎支局へ向かった。

川崎支局は、JR川崎駅東口から歩いて七、八分。オフィス街にあるビルの五階の一角を占めている。神奈川県内には、横浜、川崎をはじめ四つの支局と鎌倉、横須賀など記者が一人で働いている通信局が五つ。横浜支局は、そうした支局、通信局のコントロールタワーの役割を果たすいわば親支局。川崎支局は子支局の存在だが、支局長と記者が五人おり、横浜支局に次ぐ人員を配置している。

午後三時すぎ、川崎支局に着いた奥田と長は、ゆっくりと入り口のドアを開けた。斎藤をはじめ、磯田和昭、近藤康太郎らと支局長の吉田明がソファで待っていた。吉田はこの春、東京本社 of 社会部から転動したばかりだ。

支局内には机が中央に六つ、窓際に四つ置かれ、応接セットは隅にある。だだっ広い横浜支局の十分の一ぐらいしかスペースはないが、何ともいえない아트ホームな雰囲気があふれている。

「それじゃ、さっそく始めますか」

斎藤が声をかけた。

「収賄は小松助役だが、贈賄はわかっていますね」

と長が簡単に報告。それを受けて斎藤が、

「市議会でもいろいろ問題になっているJR川崎駅東口の再開発がらみじゃないかな」

と、スクラップブックを手に説明した。

「小松助役は当時、企画調整局長で、市の再開発と企業進出を一手に担っていたから、職務権限ははつきりしていると思うよ。おそらくこの話だろう」

市政見習い中の三年生、磯田と司法担当の二年生、近藤は、大きな汚職事件はこれが初めて。「デカイヤマだ」と思いながら、聞いていた。

白熱した意見交換が三十分ほど続いた後、突然、ファクスの受信を告げる電話音が二度、支局内に鳴り響いた。

こんな時間になんだろう。

二十秒ほどして現れた白い紙には、次のように書かれてあった。「贈はリクルートコスモス 県警鈴木」。

鈴木から流れてきた最新情報だった。

つい先ほどまで話題にしていた不動産業者ではなかったことで、みな、とまどいを見せた。

「リクルートコスモスねえ。ウーン」

斎藤が低くうなった。

「聞いたことないな」

「リクルートの関連会社だよ。不動産業者だ」